



随

想

書

綾村 坦園

某日、ある書道展覧会で、ひさしぶりで田畑忍さんに会った。たまたま談が名士の筆蹟のことになり、しまいに同志社に關係ある人たちのことになってしまった。その後、編集部からの隨筆執筆の依頼狀が到来した。おもえば、岩倉に十年近くも書道その他の講師としてつとめたくらいの外様もので、その間に

はキング寮の寮歌の作詞をたのまれ、たしか中瀬古和さんの作曲がつけられて、学生に合唱されて、ガラにもなく、うらはすかしい氣持になったことや、戦時中、学校近くの食堂へ、芋蔓の難炊をすすめるために、学生と長い列をつくって並んだことも、はるかな想い出になってしまっている今日、書きながらも余りにもズレがあるようだ。戦後、間もないころ、京都の美術工芸界の有力者の作品を寄贈してもらうことについて、いささかお手伝いをしたのがオチでもあった。

ところがまた某日、ある水墨画展の会場で、また田畑さんに会った。その折、まだ目に見ぬ「時報」なるものの片鱗をうかがうつもりが、新島先生の書の話におよび、早速その晩に編集者へ連絡するとのことであった。それから数日後、新島先生書の色紙やら参考文獻をよこしたま送りとどけられた。まさしくみなさんのご厚意によって、先生の書をしみじみと見せていただき、望外の祝福をめぐまれたことであつた。思いつくまに、あるいは魯を魚とみあやまるそしりをうけるかも知れないが、大方のご海容をたまわる次第である。書ほどその人柄があらわに出るものはなか

ろう。書はその人自身であるともいえよう。先生の書のもっとも目立つ点は、上から下へひく線である。行書でも、草書でも、迷うことなく、一気に引きさげてある。まったく純平とした垂直線をなしている。この書線が中心をなして、いろいろな字形がくみ立てられているようにさえ見える。筆順はどうであらうと、上下にはしるこの筆があらわれると、その字形がにわかに生き活きしてくるようだ。このように縦の線が力強いことは、字はたけの高いものになってくる。わが国では古くから写経体がおこなわれたので、平安朝時代より創められた和様の書は横にひらいた背の低いものができ上った。また長い間にわたつてもちいられた御家流のために、円味をおびた温和な書に見なれていたのであつた。先生の家系によると、佑筆であつた父をもたれたというが、その書はやわらかな連綿とした御家流のものである。

しかし先生の書は丈の高い形をとり、すべて鋭角的な構成をなす。じつに生新であり、直情的である。楷法の極則といわれる初唐の歐陽詢の風をしのばせるものがある。おそらくは当時、書名の高かつた巻大任の書によつ

たのであろう。また行、草書を見ると、藤田東湖より大いに影響を受けたもののようで、水戸藩との文化の交流はきわめて盛んであったことから当然であつたといえる。それだけでなく、東湖の書はまとまつた形のうちに、一種の奇骨をしめしていることも好ましかつたのではなからうか。欧法のきびしさをシンにもつて、東湖の流によつて肉づけし、先生の性情のままに筆をもちいられたとでもいわれようか。それも最晩年の新春にかかれた七絶の書には、かつてのとげとげしさはなく、東湖風をしのばせながら、穏やかな曲線をもつて、おさまっているのである。

なお今年は、先生の生年と同じ癸卯の年にあたり、とりとめのない走筆ながら、その遺響を追慕する次第である。

(元高商講師・書道家)

軽井沢にて

松山 秀雄

京に生れ京に育つて、ほとんど京都を離れることのない自分にとって、まれに旅にでたときの感慨はひとしおで、文字どおりせつせつと胸にせまるものがある。この夏も清涼の地、軽井沢にひとときを過ごし、静かにもの思うときを与えられたことを何よりの幸せに思う。宿舍はわれらの大先輩、加藤与五郎先生が自力で建てられた「創造科学教育研究所」の一隅にある。あたり一面に、青葉、若葉が生いしがり、目もさむるような緑の木立のなかで、盛夏とはいえ、まるで初秋を思わすような、和らいだ日ざしが樹の間よりもれ、ま新しい土の香のたどよう、まことに幽すいの地である。近ごろほとんど耳にすることのない鶯の声や、名もしれぬ小鳥のたくまぬさえずりがときとをわず聴えてきて、じつと耳をすます。はるかに視線をやれば、きわだつ稜線を蒼空にえがいた浅間山の偉容が、身近かにせまってくる。それでいて何か啓示的な、何ともいいあらわせない清純さを感じさせられる。

若き日にくらべて、今はかえって散策しなくなつた自分ではあるが、都塵を遠くはなれここに来て、たしかに味わいのちがう高原の

空気を、それこそ胸一ぱいに吸いつつ、研究所の周辺を朝に夕にあてどなく逍遙すると、何かしら満ちたりた、心のやわらぎを覚える。そうしたとき思い出されるのは、過ぐる日、相国寺畔で中学担任のF先生から、同志社物語をきき、感激のあまり日曜ごとに、比叡山へひとりで登り、ほとんど人氣のない山頂で、ま白い雲のただよいにじつと目をやり、ときのたつのを忘れたこと。そして、つきつきと脳裡をかすめる、大らかな夢を見つけたものである。今はそれほどの情熱もなく、それほど冥想にふけることもなくなったが、それでもここ軽井沢にきて、若き日の感傷にも似たものを持ちえたこと、それに心のすみずみまで洗いきよめ、解きほぐしてくれるほどの弛緩のときを与えられ、そのうえ、遠いかなたを見はるかすような、ぼう漠とした心境にひたり、楽しい夢想にしばしふけることができたことを、心から喜ばずにはいられない。

加藤先生は長らく軽井沢に居をさだめ、同志社のはつらつたる若人数人を年々あたたく迎え、好々爺ぜんとして、ときに毅然たる態度をもつて、われら後進のものにその道をさとされる。親しく声がいに接し、その人と

なりに触れるとき、先生もまさしく同志社が生んだ一偉材であることを身にしみて感ずる。その説かれるところ、あるいは世間より奇矯のそしりはまぬがれぬとはいえ、今やよい九十を越されたとは、とうてい思えないほどの若さと情熱をもって、それこそ熱血はとばしるような面もちで、精魂をつくして説きつづけられる。

こうしたとき期せずして思い出されるのは、かつての海老名弾正、金森通倫先生らの壇上における雄叫びである。加藤先生のユニークな生涯、数多い偉業をかえりみて、先生もまたわれらの自由の学園が輩出した、日本黎明期における開拓者の一人であり、日本文化史上に一だんとそびえる一巨峰であることに痛感する。校祖新島先生が臨終の日まで、国を愛し、母校の発展を祈られたように、加藤先生も今もなお、己むに己まれぬ至情と堅い信念をもって、われらの行くてをしめし、われらの母国が、貿易の自由化にあたり、まさに迎えんとする「第三維新」にいかに対処し、実践にうつすかをとくとくと論ぜられる。異色あるその道の先覚者をもって自らも任じておられる先生が、長が年警世の鐘をうちな

らし、また産業界と学界の谷間に潜在する盲点を鋭くついて、教育改革が焦眉の急であることを訴えられる。

先生の年来の大抱負と、名利を超越した切実な念願は、われらに強い感銘をあたえ、迷妄を打破せんとした決意をふり起こさずにはおかない。次代のにない手である若人が、新島先生の故郷、安中にはと近い軽井沢の地で、往時の同志社塾にも似た雰囲気の中に、加藤先生を通して、校祖の高まいな精神の片りんにふれつつ、一と夏を過しえたことは、なんと恵まれたことであらう。

ともあれ、これら若人のうちから、将来ひとりでも大きく成長して、文化を力強く推進する新時代の先駆者が出ることを祈るとともに、世人にも“Doshisha has a man”といえるようにありたいものと思う。

(工学部教授・物理化学)

新しい発展

川島甚兵衛

九月の初から十一月十八日まで米・欧・米の十三ヵ国を訪ね、元気に帰国、今年の同志社創立記念式典に参列した。

十三年の長期に亘る大塚前総長のご引退の挨拶は、先生らしく淡々として水の流るるが如き想を禁じ得なかった。初めの滞米中、例によってアマスト大学に敬意を表するためプリンプтон総長をお訪ねし、ご厚意に甘えて同行の親友遠山医学博士と長女の富美子も同伴、総長邸に一夜お客になって来た。プ総長が二週間置きに互に手紙を交換して大塚総長と連絡を密にしていると聞き、同総長が前総長に対して非常な敬愛の念を捧げられていることを親しく見て、前総長の比類なき国際的徳望に頭を打たれたのだが、その総長が今日の式典で新総長住谷先生に対して親情溢るる祈禱を捧げられ、新総長の前途に上なる神の祝福を祈られたのは感銘深かった。

住谷先生は私の在学中先生の講義を聴いた因縁もあり、人間的なご人格と豊かな先生の学殖に加えて、吉野門下の逸材でもあられることはご承知の通りで、「中興の祖」と讃われる大塚前総長の後を継いで明日否百年後の同志社のため、慣れない行政責任の最高の地

位を進んでお引受けなさったのを、また感激深く涙を以って見たのだった。

新総長は披露パーティーで難波院長（神戸女学院）が敢えてお話になったごとく、本当に総長としてはズブの素人と言つて過言でない。演説も慶応義塾の高村塾長のあの洗練さは皆目ないお下手な先生。しかし先生のお顔と眼に秘められている同志社愛の誠心は、必ずや前総長のみならず、全同志社人の期待に反かぬだけの業績を挙げて貰えると思つた。只一つ、何うぞ新総長が健康を全うされて——あの日のお顔色は期か緊張の勢が青さめておられたが——、その任期を存分にご活躍されるようにと、それを念じて止まないだけだった。

アマスト大学のブ総長がお会いするまでコロンビア大出身の医学者であり、臨床家でもあることを全く知らなかった私は、その明朗悠々たるご人品は勿論、「私は未だアマストの一年生だ」と仰つて、懸命の勉強をなさつてゐるのに敬服した。父君がアマストの理事長だったと言うのがブ総長をアマストへ引張つた最大の根拠かと思うが、住谷新総長と同じくブ総長も他学のご出身であることは不思議な同似性だと思つた。

約二ヵ月半、七十五日の旅行で痛切に感じたことの一つは、世界が科学開発と技術者不足の補充に多大の関心と努力を払つてゐることで、この点もし新島先生が今日の同志社をご覧になったら何んと仰るだろうか。

同志社は何うしても住谷新総長の時代に、内的にも外的にも、学園の内外が相呼応して、充分な発展の基盤を築かねば、恐らくその創立の精神も今後の本来の発展も何処へ行くか、蓋しその岐路に在ると申し度い。それなればこそ新総長が選ばれたのだと私は想う一人である。

ともあれ今日の世界は昨日を追う世界ではない。同様に今日の同志社は昨日にあぐらをかいてはいけない。学園の全員は校友、同窓を問わず、教員・職員・学生・生徒も一致団結して、新総長の理想に協力すべき秋であり、その機会を逸してはならないと思うものである。

（昭一〇・大経卒・川島織物社長）

草野球

上田堅一郎

先日運動会のリレーで生れて始めて一等になってテープを切る味を味わせて貰つた。高校の岩倉寮の運動会に分団対抗リレーという種目があり、担任の教師が各分団必ず一名ずつ出ることになつていたので、生徒達から引つ張り出されてアンカーを走らされてしまつた。

走る距離が僅か百米なのと、前の走者のリードが余りにも大きかつたことのために、小学校以来走ることにかけては、全く自信のない私が幸いにもテープを切る幸運に浴したというわけである。

私はスポーツというものは自分でやつてこそ意味があるものだと思つてゐる。プロ野球がはやるのも結構だけれど、草野球が盛になる方がはるかに望ましいと思つてゐる。そしてまた野球に限らずいろんなスポーツがあらゆる階層の人達に手軽に行なえるようになる

ことがもつと大切なことだと思う。

同志社高校は昔は野球が強かった。誤解のないように——生徒の野球部ではなく、教職員の草野球チームである。新制高校のできた翌年に岩倉に移って二、三年間というものは

その最盛期だった。教員の中に若い層の多かつたせいもある、とに角よく方々のチームと試合をよく勝っていた。何時だったか京都の社会人野球大会にオール同志社で出ようということに話がまとまって混成チームを作って出場したことがある。そのスターティング・メンバーの約半数が岩倉の教員で占められていたのだから鼻息たるや推して知るべきで、『岩倉ナメナーズ』とかなんとか称して威張っていた。ところでこの混成チームの実力もなかなか馬鹿にならず、とんとん勝ち進んで、準優勝戦までいつてしまった。ところがほかのチームはどこにもちゃんと各選手のユニホームを揃えて試合に臨んでいるのに、同志社だけはみんな思い思いのいでたちでやっている。準優勝戦に勝てば優勝戦は西京極でやることになるので、何とか試合の体裁をととのえる上にも、ユニホームを作って来てほしいという主催者側からの申入れがあ

ったとか。然し幸か不幸か準優勝戦は延長戦の末一点差で敗れ、主催者側の心配も杞憂に終り、同志社も無駄な出費をせずにすんでしまった。

最近の岩倉は昔の強さは全然持っていない。組合のソフトボールの試合も大抵一回戦で敗けている。全く弱くなったものである。しかし弱いなりに草野球精神は旺盛で、二年ほど前から明治・大正生れと昭和生れとに分けて、年一回教員会議の最も暇な日を選んで試合をすることになっている。今年はさらに若手がふえたので、昭和生れをさらに二チームにわけ、三チームでリーグ戦までやった。昭和二十四、五年頃の若手も今は壮年組で、練習をすれば却って調子が狂う始末。しかし試合の結果は依然として明治・大正生れのチームの二連勝に終ってしまった。

(高校教諭・宗教主任)

いなかのようす

並河 純

学生のころから住みなれた京都を引きあげて、山陰に帰り住んでもう一年になる。

山陰はたしかにへいなかだ。地方新聞に現われる日常のできごとをみると、いささかばかげている。経済的基盤のうすさは各種の統計にみるとおりだが、二、三十人の女子を使う製縫場が大阪あたりの企業の下請けにできると、八新工場として紹介されるしまつだ。地方ボスの、なんでもないこせがれがアメリカに行くというと、羽田空港に見送った人は、だれとだれ、などという記事が出る。もつとも、国外旅行などこの地方でもそう珍しいことではないのだが、有名なボスのせがれということが記事に値するらしい。

とは言っても、ぼくの日ごろの暮しではへいなかになるがための不自由さはほとんど感じない。京都にいたときには、よく「京都はせまいね」と言ったものだ。どこに行っても、だれか顔見知りに出会う。教壇に立っていたので、人に顔や名前を知られる機会が多かったのも理由ではあろう。そのせまい京都でいどのへひろさかはここにもある。ぼくが行き来する範囲——松江、米子、出雲、境——を併わせれば、さほど世間を気にしないで、

バーやおでん屋にも結構行ける。交通だってまずまずだ。松江—安来—米子—境には、民間定期バス二社がせり合って、あまり待たないで乗れる。この間の道路もいい。あの、だいたいいろの八京都バスVが走っている路線などとは比べものにならぬ便利さだ。

あまり愉快でないことは観光客の横暴である。人口密集地の住民たちが息ぬきに来る。この人たちがこの地方と地方人に対して無礼だ。とくに車中ではわがものの顔にふるまう。高度の生産手段のないこの地方の人々は観光客を観迎する。八観光資源の開発Vが山陰二県の願いになっている。なさない話だと思う。農業なら農業でいい、この地方の人にのぞみたいのは自分と自分のしごとに誇りを持つことだ。そのための条件をつくることが国と地方の施策にほしい。

さて、休み前に同志社大学の学生二名が訪ねてきた。休暇中に米子でマンドリンクラブの演奏会と教授おふたりの講演会を開くので協力してほしい、ということだった。協力とは、音楽会のキップを買うことだったのだから、音楽会のキップを買った。この学生が事後ふたたび、やってきて歎いていた。「同志社の

先輩は非協力的だ。早稲田や慶応の学生音楽会にくらべ、まことにさびしい」ということだった。ぼくは同志社の八先輩Vでもないし、第一、休み中の学生活動としてこの種の催しに賛成ではないけれど、この学生二名の純な言い分には同情した。そして、先輩が非協力的である理由をぼくはつぎのように話した。

すなわち、この地方では八同志社Vは根が浅い。時代も違うし、学制も異なるが、ぼくの松江中学在学中などは同志社をすくなくとも八大学Vとは考えていなかった。八大学Vとはまず八帝大Vであり、さもないれば、はなやかな早慶戦にひかれて、早慶両学であった。したがって今のこの地方の中堅以上の人たちは、母校同志社にさほど誇りをもっていない。この地方にあって「オレは同志社出だ」と自負をもって語る人には出会わない。——それが同志社らしいよきではあろうが——。これが非協力的になる理由のひとつだ。さらにもうひとつは八東京の魅力Vがいなかの人をとらえるからだ、ぼくの会社のBGたちも早慶の学生音楽会と言えbaumうすこしずつで行くだろう。学問、教育の実質的な高さはこの方面ではあまり問題でない。しかし、お

そらく諸君、または、諸君のごく近い先輩が社会の中堅になるとときには、ようすが変わるだろう——と、学生に話をした。

ぼくも十数年、同志社でお世話になった。戦後の年を追うての同志社の充実ぶりをじかに知っている。そして「オレガイワクラデオシエタコドモタチガヤガテ……」とひそかに期待した。すでに八いなかびとVの嘲うべきゆめか。

(元高校教諭・山陰酸素専務)

親父一年生

森田 泰世

「子をもって知る親心」「親の心、子知らず」とは私の父からよく聞かされた言葉だった。もつとも聞かされた頃は独身で一向にピンとこないで先ずお説教としか受けとれず、私が親になったらこんな面倒な説教は自分の子にはすまい、と馬耳東風に聞き流した。

ところが結婚生活も五年を経て、自分の経済状態にも無頓着に男の子をつくり二年近く

になった今、悲喜交々の感情を抱いて戸迷っているが、素直に言えば一番可愛いときらしく毎日の生活の大きい張合いとなっている。

予防注射だの、鼻水を垂したから風邪をひいたのじゃないか。元気がないからどこか具合が悪いのではないか、階段から転げ落ちたのだ、外へ出れば他家の子供と喧嘩して泣かされていなか等々、気の休まる暇もなく心配になる。とにかくなんとか世間並にうまく育てたい一心だ。日頃は一人子のせいかな甘え坊で、我儘でとても手に負えない。

妻は家事と子供の世話で手一杯という始末で教育などなかなか教科書通りにうまくいかない。結局こいうった休む暇もない心配が親心かなあと漠然と感じてきた。

ところが、もう一つ私が合点できないものは、両親や先輩諸先生がよく口にする「愛の鞭」だ。「決して憎くって叱っているのではない。みんなお前が可愛いから叱るのだ」といしながら叱られたことである。理窟では確かにそうだろうが、感情として真実だったのだろうか。凡てが信じられないという訳ではないが、現在子供と生活して、親として私の考

えたこと、また希望していることに子供は殆んどといっていいくらい思い通りには行かない。根が子に甘いものだから、泣く子と地頭の例えですぐに気嫌取りをするのだが、そのときは本気で「こん畜生」と内心憤慨して怒っている自分を感じている。全くそのときは腹が立つて義理にも「お前が可愛いから、お前の生来を考えるから怒るのだ」とはいえない。今は本能に従って生きているような幼児をもつてこんな云草は妥当を欠くが、さらに成長して物事の判断がつくようになっても同じようなことが度々あるのではないだろうか。私もそのときはこのうまい文句を使つて怒つてやろうと思つてゐる。大人というものはいい気なもんだ。自己を正当化する理窟を子供より多く知っているから結構だ。が、子供が物事に判断がつくようになれば、こうしたことを実際には見透して、親なんかすぐ感情的に怒つて理論的に説得する根拠がないものだから、言訳けしているのだと内心考えるとしたらどうも良い気持がしない。現実には私の心配をよそに日々子供は成長しているようである。そして私が以前そうであつたように私のいうことはおかしく聞こえ馬耳東風と

なる時期が来るだろう。親というのは、子供が成人するまで扶養の義務があるのは当然ではないか。それが出来ないようなら始めから生まねばよい。精神的であれ、経済的であれ恵まれない養育をするのであれば、それは親の責任である、ときめつけられても仕方がないと私は感じている。

これは戦中の教育を受けた私自身でも考えることだから、今の子供ならなおはつきりと割り切つて理窟をいうのではなからうか。何れともあれ表面的なことばかりだったが、親という位置は、家庭の絶対君主でない限り感情的にいろいろな矛盾を余儀なくされ、ますますむづかしくなっていくものだ。親父一生は、そぞろ心配の種を増し、「子の心、親知らず」になるまいと警戒しながら「子をもつて知る親心」を愚痴にまで育てようとしている。

(本部職員)